

形成外科、美容医療の精神医学：美容整心精神医学 Cosmetic

Orthopsychiatry の概念と実践

はじめに

私は1973年に大学を卒業して以来、約35年間を形成外科医として過ごしました。

形成外科医としての私は、『どんな高度な変形でも治してみせる。』との気概で、挑戦的な手術を行い、頭蓋顔面外科や皮弁再建外科の領域では、それなりの実績をあげてきました。しかし自分の思い入れが、成果として患者の気持ちに届くことは、むしろ稀で、手術治療の限界、自らの力量の限界を知るなかで、「外観障害の心」とか「外観にこだわる心理」とは何かを問題意識として持つようになりました。そこで、2000年には「医美心研究会」を設立し、外観の治療を形成外科、化粧美容、心理学の三位一体で当たるべく三者共同で研究を始めました。しかし、その答えを出すべく展望は開かれず、2010年には形成外科を辞し、精神科に転科し、精神医学は、外観障害の心をどのようにとらえ、ケアできるのかを学ぼうとしました。

しかしながら始めてみると精神科学には、形成外科学における「皮弁と血行」のように、理論と実証に基づいて進歩が展望できる自然科学的な学問領域は見当らず、戸惑うと同時に、外観障害に関しては身体醜形障害という障害はあるものの、ほとんどの精神科医は関心すらしめさず、旧態依然とした先の見えない医療（私にはその様に見えるのですが）にこだわり続ける姿勢に失望し、いきおい関心は「心とは何か、心は何処に存在するのか」とう原初的な未解決問題に向き、脳科学やユング心理学を読む中で、「ここは物であるのか」とか「こころと身体（脳）とはどんな関係にあるのか」を問う、いわゆる心脳問題に興味を持つようになりました。

勉強してみると、心には量子論が関係するというような興味深い知見や考察があり、必然的に改めて古典物理学から量子論を勉強することになりました。

精神波 psychic wave、

量子論、脳科学、心理学、分子生物学、科学哲学等を渉猟する中で、私は、心・精神にも波動性があるとの見解に至り、量子論でド・ブロイの言う「物質波」（電子に限らず、すべての物質の正体は波である。）に対比して「精神波」の概念を創発し、物質も精神も、すべてのものは波動である（波動性を持つ）という考えを持つようになりました。また、肉体の物質波を**身体波**と名付けました。

自律統合性 Autonomous Integrity:AI

自律統合性機能 Autonomous Integrity Function:AIF

また、量子論の不確定性原理では説明できない、生命、精神から宇宙に渡る不可思議

な調和性を説明するに当たり、古代以来の霊、神に代わる超越的な存在（中国で古くから言われる『扶正』の概念、そしてヒポクラテス、ベルナール、キャンノンに通じる理論、日本では「大いなるはからい」。）を想定し、『自律統合性 **Autonomous Integrity : AI**』の概念が生まれ、そしてそれを生命、精神から肉体、ミクロからマクロ（宇宙）のすべての物質、森羅万象の統一性を説明する根本原理としました。

またそれを作用させる機能的な概念として**自律統合性機能 Autonomous Integrity Function:AIF**を想定しました。

自律統合性 **Autonomous Integrity** は、ヒトにおいては、「神経系」、「内分泌系」、「免疫系」に「精神（こころ）」の4つの系が相互に非線形的に影響しあい成立し、自律統合性機能 **AIF** の機序としては、主として内分泌系、自律神経系経由で「免疫系」を介して作用し、自律統合性の調和を図るものと考えています。

それは、生体においては、「恒常性ホメオスターシス」、「自然治癒能」と言われているものに近似し、精神においては昨今「レジリエンス」と言われているものの概念に近いものと考えています。

また、健康とは、身体波（物質波）と精神波の振動が正調（リズムカル）であって、両者が共振している状態であり、それをコントロールする機能が自律統合性機能 **autonomous integrity function : AIF** であると説明します。

AIF が機能不全になると、リズム振動が乱れ、共振が失調するため健康を損ない、やがて病的な状態に進行すると解釈します。

身体波、精神波のリズム失調を「自然回復可能な領域」と、「医学的支援なしでは回復不可能な領域」に分けて考えると、前者の状態は、病気未満といえ、後者に移行した状態が病的な状態と言えます。

整心精神医学 Orthopsychiatry の概念

前者の、つまり正常から病気未満の領域で、主として身体的な健康を扱うのが、健康医学、抗加齢医学、美容医学であるとするれば、同領域の、主として精神的な健康を扱う医学があっても良いのではないかと考えるに至りました。

そこで、精神波のリズム振動が先行的に失調し、精神障害の範疇までには至らないが、精神的、霊的（生きる意味、価値を自明のこととして生得している）に健康的な生活に支障が生ずる、いわば「境界領域のこころ」を扱う医学として

「**整心精神医学 Orthopsychiatry**」の概念を提案したいと思います。

「整心」の意味するところは、心の安定、向上性であり、精神波のリズム振動が乱れ、身体波との共振が失調しバランスを失った精神状態を、波動リズムを整え共振を復調さ

せることで、精神のバランスを復活させることであります。語源は整容、整体に倣ったものです。

美容医学が異常とはいえない外観に、より美しい外観を追求するように、

整心精神医学は、医学的には正常域の精神状態を、より健康的で、前向きな生き方を志向する精神状態 (beautiful mind と仮称) の獲得を目指すもので、アドラー心理学に親和性があり、いわゆる60年代に米国で起きたスーパーヘルスの概念 (単に病気にかかっていないということ以上に、積極的に健康について考え、洗練された生き方、暮らし方を求める運動) に近いものであり、そのような臨床領域を拓くものでもあります。

「整心精神医学」のもう一つの目的は、生きづらい精神環境を生き易い精神環境にする、いわゆる霊的な健康 (生きる意味、価値を自明のこととして生得している) に通じる精神状態を回復することでもあります。

美容整心精神医学 Cosmetic Orthopsychiatry の概念

整心精神医学のなかでも、「外観、特にその美へのこだわり」が強く、社会機能を損ねている (社会生活がスムーズに送れない) が、精神障害 (症) に該当しない人に、どのように対処して外観のこだわりと社会機能の両立を図るかを、精神医学と形成美容外科学の両者が連携してアプローチする医学を「美容整心精神医学 Cosmetic Orthopsychiatry : COP」として提案したいと思います。

美容整心精神医学は、学問的には、文字通り、外観、美容が整心 (心の安定性、向上性) に及ぼす影響、あるいは整心が外観、美容に及ぼす影響を研究する新しい学問分野とし、臨床では外観の障害、あるいは外観の美の拘りのために社会機能が低下、障害されている人を対象とするものとします。

外観の障害の心理は、精神分析的に考察すると、いわゆる「対象喪失」の概念で考えると理解しやすく、また、「外観や美へのこだわり」の心理は自己愛あるいはリビドー (性的な欲望、性本能) の一つの心理形態として理解すると、形成外科、美容医療における患者心理を理解しやすいと思います。

本来普通にあるべき外観の状態が生来的に得られていないという場合 (先天性変形) や、外傷や病気により外観に障害を残した場合 (後天性変形)、あるいは加齢によって若い時にあった美しい容貌を失っていくというような場合 (老人性変形) の喪失体験は、「対象喪失」の中の「身体的自己の喪失」に相当するであろうと思います。

対象喪失体験は、失った対象に対する思慕の情、悔やみ、恨み、自責、仇討の心理を始め、愛憎のアンビバレンツを再体験する悲哀の心理過程（フロイトの言う「**悲哀の仕事**」）を経て初めて自我は新しい自由を見つけ、心の平安を獲得して行きます。

外観障害は上記のそれぞれの場合で成立過程も異なりますから、悲哀の心理過程も異なりますが、いずれにしろ美容整心精神医学は、悲哀の仕事の良き伴侶となってかわり、そのプロセスが滞りなく完結し、心の平安を得て社会復帰が出来るよう手助けをするのを目的とします。

先天的な外観障害では、思春期、青年期になって、自我意識が目覚めるにつれてハンディキャップのある自分に気付き、それらを克服して社会に適応しなければならない人生が始まる。劣等感コンプレックスとその補償の自我心理機制が生じ、また、喪失の悲しみ、恨み、他者を責める気持ちなど対象喪失の悲哀の仕事とのかかわり合いの中で、その人の人間的成長が決まってくる。

この場合は、対象喪失を成長の過程で徐々に認識しているので、急性的な情緒危機はもたらさないが、喪失していない、健全な外観の体験を持たないので、理想化した喪失対象を描きやすく、形成外科手術に満足しにくい心理傾向がある。

また「恨みと報復」の心理を背景に、相手不詳の報復の原理に支配されており、悲哀の仕事の中で、大きな援助者として期待された形成外科医は、手術の結果で満足させられないと、失望から報復の対象にさせられる場合が少なくない。

外傷や病気による後天的な外観の喪失は、多くは自我意識の成長後に突然生じることが多いので、絶望的な急性情緒危機として「悲嘆 grief」を経験する。

時間を経て悲哀の仕事に入るが、悲哀の心理過程は乳児のように「抗議と不安」「絶望と悲嘆」「離脱」の原初的な経過を取り、その苦痛は大きい。

しかし、苦痛に対する躁的防衛で、勉強や仕事に集中して社会的に成功し、自我の昇華を果たすこともある。

対象喪失以前の状態を知っている為、喪失の理想化は少なく、形成外科手術の結果を受け入れやすい傾向がある。

美容医療が対象とする「加齢による対象（若さ、美貌）喪失」では、まず、失うのではないかという喪失予期の時期があり、やがて失っても、対象への執着が続き、物的現実性と心的現実性が乖離し、心の中では喪失を受け入れないプロセスが続く。次いで現実を受け入れる「対象を失った部分 given up-part」と、すぐには現実を受け入れられ

ない「対象を失っていく部分 giving up-part」の二つの心理が交錯する状態になるが、やがて「断念と受容」の心境に達し、悲哀の仕事は完結されます。

一方、一般の美容医療を受診する患者（以後、美容患者）の心理は、私は自己愛とリビドーの理論で説明出来ると考えています。

自己愛とは、自分を愛する、大事にする、可愛いと思うような自然な人間の心理であり、リビドー（ある種のエネルギー、ここでは愛のエネルギー）が全部自分に向かってしまっていて、他の対象には向かわない状態とされ、自己以外を愛する対象愛は成立しないとフロイトは定義しました。しかし、コフートは自己愛と対象愛は両立するとの理論を述べ、フロイトも後期になると、自己愛においても一部のナルシシズム型の対象にはリビドーは向かうことが出来るとし、それは①自分の気持ちをシンボライズしたようなもの、②自分を象徴して表しているようなもの、③こうなりたいと思うような自分④自分の好ましいところはさらに磨きをかけたい、⑤若い頃の自分に戻りたい、というようなものであり、これらには自己愛が強くともリビドーは向かうものとなりました。

この自己愛の対象選択の心理は、‘誰だれのタレントのようになりたい’ というような美容患者の象徴的な心理に良く相関しているように思われます。

また、自己愛は、コフート理論では、誇大自己（自分をどんどん偉く発達させよう、立派に美しくさせようと思う自己愛）とイマーゴ（理想化した親のイメージ）で説明され、いずれを相手に認めてもらい、賞賛を受けたい気持ちの表れであるとされます。従って、褒める相手が必ず必要であり、褒められて誇大自己を満たすことが、自信を持ってさらに成長しようとする健全な自己を成長させることにつながるとしています。もし、満たされないと、「自分だけが偉いとか美人だ。」と思いがったりして、いびつな自己イメージが肥大化してしまい、周りから相手にされない人間に育ってしまうといえます。

エリクソンによれば、自分をブラッシュアップして伸ばそうとする健全な自己愛が人間には本来的にあるとしており、健全な自己愛は人間成長の動機づけとして重要であると言っています。

一方始めに自己愛に対比して述べたリビドーの本来の意味は、フロイトの構造論の自我、エス、超自我の中のエスの一つで、自分が知らない世界にある（生得的な）本能のようなものの内で、性本能、エロス、愛の欲求として表現されるものをいいます。言い換えれば、もてたい、もててセックスをしたいという欲望、つまり、究極には種の保存本能に行きつくものになります。

美容受診患者の心理にはこのような本能的な目的性を持つ要素もあるのではないかとというのが私の意見です。

受診動機に自己愛よりリビドー的な要素が大きいと、執着も強く、劇的な変化を求める傾向があり、結果への満足度も低く、関心の方向転換も難しく、治療が中断しやすいのではないかと推察します。

従ってこのような患者では、悲哀の仕事が頓挫して、リビドーの代わりにアグレッション（攻撃性）が前面に出てきたり、神経症的、抑うつ的な精神状態となり問題を残してしまうことが少なくないのではないかと考えられます。

また美容患者には、精神的に病的な動機を持つ患者も受診するから注意が必要です。

こだわりが、身体の一部（鼻とか眼）に集中している場合は自体愛（自己愛の原初形態）の可能性があり、その場合は自我発達が未成熟で、いわゆるレベルが低く意思疎通が取れず何かと理解が得られない可能性があります。

リビドーが常に自分に向かいっぱなしで、自分のファンタジーの世界に入り込んでしまっている自己愛神経症的な症状を示す場合は、自己愛パーソナリティ障害、統合失調症の可能性があるので注意がいらいます。

もっとも多い疾患として身体醜形障害（醜形恐怖）がありますが、米国での調査では、この罹病率は形成外科、皮膚科の患者においては10%に登るといいます。従って美容患者においては、もっと高率に存在するのではないかと推定できます。

身体醜形障害の診断基準は DSMIV（米国精神疾患の分類と診断の手引き）によれば、1）身体のある部分に、想像上のものか、あるいはあってもほんの些細な症状に極めて過剰にとらわれてしまう。2）そのことで生活機能に障害が生じる。3）他の疾患では症状の説明が出来ないもの、となっています。

Aging における「喪の仕事」、自己の成長における「自己愛を満たす過程」においては、美容医療は有効な手段となりえますが、両刃の剣であることの認識は重要であり、また、患者が病的な要素を持っている場合は、病状を進展させてしまうことになりかねないので、美容医療は美容整心精神医学との連携が望ましいと考えます。

心身の健康さは美しさの基盤であることに誰も異論のないところと思います。恋をしている女性は輝いて美しいし、ストレスを抱えて抑うつ的な人は美しさを損ないます。

美しさを単に生物学的な視点から見るのではなく、心理的な側面から見るのも意味があると考えます。それはよく言われる観念論ではなく、美しさの認識（自覚）は、心理的要素が強く、逆に言えば心理的サポートは外観にかかわる形成外科、美容医療の治療効果を上げる意味でも有用と考えるからです。

美容整心精神医学は、形成外科、美容医療の持つポジティブな要素を、どのように生かし精神的、社会的な生活に役立てるかを、精神分析的、精神免疫学的、心理社会的に研究するものでもあります。

さらに美容整心精神医学の「美容」の意味するところは、外観美容の他に、現在のこころの健康状態をさらに高め、向上的で洗練された、幸福感の強いライフスタイルの獲得を目指す意味合いも含んでいます。(super healthy and beautiful life)

従って美容整心精神医学の定義としては、

『外観、美容が整心（心の安定、向上性）に及ぼす影響、整心が外観、美容に及ぼす影響を精神分析的、精神神経免疫学的、心理社会的に研究することで、美容医療の医学的に正しい運用を促進し、心理面から美容医療の有効性を高め、かつ現在のこころの健康状態をさらに高め、向上的で洗練された、幸福感の強いライフスタイルの獲得を目指す。

臨床的には、「外観、特にその美へのこだわり」で社会機能を損ねている（うまく社会生活が送れない）人や霊性領域（生きる意味、価値などの生の根源に関わる、精神の上部構造）の不調和によって『生活に躓いている』人に対して、精神医学と形成美容医学が連携して、精神的、霊的に健康な社会生活への復帰を目指す医学』となろうかと思えます。

外観、つまり顔、ボディイメージに悩む精神障害は身体醜形障害、強迫性障害、不安障害、抑うつ性障害、双極性障害、統合失調症スペクトラム、パーソナリティ障害等多岐渡りますが、美容整心精神医学では明白に精神障害に分類されるものは基本的には含まず、かといって精神、心が全くの正常、健康とは言えない境界領域（生活に何らかの障害が生じている）を基本的に扱います。

精神波のリズム振動が、正調ではないが、不可逆的なほど、大きくは失調していない状態を想定しています。

美容医療は、健全な自己愛を成長させる方向に持っていければ、人間成長（道徳心のある、不安に強く安定性があり、向上性のあるような）において重要な役割を果たし得るし、強迫的な外観のこだわりに苦しむ脳のリセットの機会にもなれば、身体醜形障害の治療として適応されうる可能性もあります。

美容医療の持つポジティブな面の評価が一般に低く、逆にネガティブな面が強調される理由は、一つは人間心理より美容医療が与えている社会心理が優先されていることに

あろうかと思われ、美容医療提供側にもその問題性を意識する必要があるものと思っています。

以上の流れで「美容整心精神医学の概念」が出来るに当たって、私は自ら、この概念を臨床で実践し、この概念の正当性、有用性を問いたいとの思いに駆られ、美容整心（コスメチックオルソー）メンタルクリニックを創業することにしました。

美容整心精神医学 Cosmetic Orthopsychiatry:COP の臨床－美容整心

（コスメチックオルソー）メンタルクリニック

前記した美容整心精神医学の概念を実践するために、美容整心（コスメチックオルソー）メンタルクリニックを創業し、以下に述べるような診療を行っています。

対象となる人は

* 「外観、美容の悩み」を持つ人

悩みが、了解可能な正常な悩みであるのか、あるいは身体醜形障害、強迫性障害、不安障害、気分障害、パーソナリティ障害等による通常理解を越えるものであるかを診断し、その境界領域であれば、美容整心精神医学的なアプローチでサポートを行い、精神障害の範疇に入れば精神医学的な治療を行います。

また、「外観の障害及び悩み」の実際的、具体的な対応としては、形成外科的、あるいは美容外科、美容皮膚科的な治療の適応について相談にのり、精神医学と形成美容外科の両者の立場からの的確な治療方針を提案します。

<形成外科患者の術前術後のメンタルケア>

程度にかかわらず、形成外科患者は外観の障害と身体的自己喪失という精神的なストレスを必ず持ちますから、患者の社会生活を精神的に支えることは、形成外科的治療を円滑にし、かつ、手術治療の効果も高め、患者の社会復帰をスムーズにします。

また、形成外科医としての立場から、形成外科的治療のセカンドオピニオンの相談にも乗ります。

<美容外科手術（美容皮膚科的施術）に行く前、術後の悩みの相談>

① 手術（施術）希望の判断が、冷静正常な精神状態でおこなわれているか、背後に隠れた精神のアンバランスや偏りによるもの（精神波の失調状態）ではないか、あるいは、病的な思考による判断ではないかの診断をします。

当事者のみならず、家族、周辺の人達の相談にも応じます。

② 希望する手術（施術）が医学的に適応があるかを、（当事者間ではない）中立的な立場で形成外科、美容外科、精神科の専門的な意見をセカンドオピニオンとして提示します。

③大学病院、基幹病院、個人クリニックにかかわらず、希望に沿った最適な形成外科医、美容外科医、美容皮膚科医を紹介します。

③ 術後の悩みの相談にも乗り、解決の方策を提案します。

*** 「リストカットなど自傷行為」を繰り返す人**

自傷行為のキッカケとなる心理的要因を判断し、背景に精神医学的治療に必要な精神障害の有無を診断します。

境界領域なら、援助者としての姿勢を揺るがせずに、整心精神医学的なサポート、治療を行います。

入院治療などの必要に応じて、精神科専門病院、大学病院精神科などを紹介します。また形成外科医の立場から、**自傷の癍痕の形成外科的治療の相談**にも応じます。

*** 「生きがい、やる気の喪失」など実存的な悩みで生活に支障のある人**

心理的要因が、霊性領域の悩みにあるのか、うつなど気分障害、パーソナリティ障害あるいは適応障害などの精神症によるものかを診断し、境界領域なら整心精神医学的なサポート、治療を行います。精神症であるならば、精神科的治療を行います。

整心精神医学の治療法

整心美容精神医学は新しい概念の医学分野ですから、前述したような理論を踏まえ、これからクライアントと手を携えて、より有効な方法を探究し、樹立してゆくのが基本的なスタンスとなります。

整心精神医学は、原則として精神障害ではない、境界領域の人を対象とするので、精神医学的な治療は基本的には適応されません。

自律統合性機能の機能不全による精神波、身体波のリズム、共振の失調を原因と捉える観点から、自律統合性機能 AIF の強化を図り、物質波、精神波のリズム振動の回復を図るのが治療の根本理念になります。

AIFの失調に最も直接的に大きくかかわる免疫力の回復強化が治療の基本で中心となり、それによってレジリエンス（精神の打たれ強さ）の強化を図って行きます。

人の健康は、心身一体的 holistic な心身相関であるという認識からも免疫力は、心の免疫力、身体の免疫力の双方を強める必要があると考えています。

免疫力は、神経系、内分泌系、免疫系が非線型的に相互に影響しあって維持されますが、心の動き（感情の変化）も免疫（特にナチュラルキラー細胞）に大きな影響を与えるとされます。

臨床心理学的な手法で、心が安定した向上性のある状態（整心）、ポジティブ思考になるように持って行き心の免疫力を高め、生物学的な手法で身体的免疫力を高めて相乗的に AIF 強化をはかるようにします。

まずは以下のような治療法を行います。

1) 生活療法

なるべくストレスを感じない生き方、楽しく生きる、ポジティブな考え方をするという生活の在り方を目指すのが生活療法の原則となります。

*生活リズムの回復

日内リズムの乱れは体内時計を狂わし、精神波を乱し、AIFの機能を弱めます。事実、日内リズムの変調が免疫力を低下させるとしたエビデンスを言う論文（ナチュラルキラー細胞にも日内リズムがあり不規則な生活はナチュラルキラー細胞活性が低下する。）もある。従って、昼夜逆転のような生活を正し、免疫力を高めることを基本として捉えます。

*「ルティーンルーティーンの習慣」を身に着けることで生活リズムの習得を獲得するようにします。何をすべきか迷い、悩むことから解放され、継続できればある種の達成感から自信が生まれてくると期待します。

（プロ野球選手のイチローの厳格にルティーン化された日常生活が、彼の業績の基礎となっていることは有名です。）

*脳のリセット

持続するストレスは脳から視床下部へ伝わり、自律神経系、視床下部・副腎皮質系を介して免疫力を下げる（言い換えればAIFを機能不全にする）ので、神経系、内分泌系、免疫系の調和の乱れ（すなわちAIF機能不全による精神波、身体波のリズムの失調）をリセットします。ストレスの刺激をいったん遮断して、AIFを回復させ、免疫力を高め、狂った生活リズム、精神波のリズム失調をリセットするようにします。3者の統合機能が前頭葉にあるとされるので、ストレス刺激を遮断する、脳をリセットする有効な方法を見つけていきます。

脳をリセットする方法としては、「笑う」、泣くなど感情の放出、運動や趣味の没頭などが言われていますが、クライアントと一緒に、本人に合った方法を根気よく見つけスイッチが入るようにしていきます。

種々の芸術療法も考慮します。

*サイモントン療法

ネガティブ思考の精神的ストレスは免疫を著しく弱めるので、「良いイメージを想起するサイモントン療法」を取り入れ、楽観的なポジティブ思考のライフスタイルを目指すようにします。

2) 免疫学的精神療法、カウンセリング

精神神経免疫学を念頭において、ツウーパーソンサイコロジーの理念に則って森田療法、認知療法を基礎に置いた精神療法、カウンセリングを行っていきます。

外から個の心理を見るというフロイト以来の臨床心理学ではなく、個と治療者

が一体となった、相互が関係性の中で存在するという、コ福特、ストロロウの量子論的（重ね合わせ、多世界的解釈）な考えに同調するからです。

3) 食事療法

免疫力を強化することを基本的な考えとして、分子整合栄養医学（モレキュラーオルソー栄養学）に基づいた食事療法を指導していきます。

分子整合栄養医学とは、ノーベル化学賞のライナス・ポーリングが提唱した、身体（脳）を分子のレベルで考えて栄養状態を調べ、不足している栄養素を見極め、それを補うことで精神障害を治療しようとするものです。

また、腸内細菌叢の減少が、免疫力を弱め、アレルギー、自己免疫疾患やうつ病、心の不調を増加させたとするという臨床報告に基づいて、腸内細菌叢善玉菌を増やすような食事指導も行います。

4) サプリメント

免疫を強化する有効なサプリメントがあれば、クライアント本人の有効性を確認の上使用して行きます。

5) 芸術療法として「化粧療法」、「生け花療法」

現在の芸術療法として代表的なものでは河合隼雄の「箱庭療法」や、音楽療法などがありますが、私は形成外科医としての経歴から「化粧療法」を行いたいと考えています。現在、化粧美容業界でも化粧療法と称し、化粧で障害者や高齢者の意欲を高め、生活の質向上が図れるとする運動があるが、ここで言う化粧療法とは、化粧の状態でクライアントの心理背景を読み取り、それを本人の気づきに導き、（あるいはただ化粧をする行為によって、）正常化への道筋をつけようとするものです。あるいは化粧行為の中で、脳のリセットをはかることで、免疫力を高め、心の整心に導こうとするものです。

また、花を生けることで、自然の美や安らぎに触れ、作る創造性の刺激が脳のリセットのスイッチとなるよう指導する生け花療法も考慮しています。

6) 薬物療法

原則として薬物は使わないこととし、応急的に必要な場合は、精神薬理学を基礎に、効果が十分期待できる場合に限って、必要最小限の薬物療法も併せて行う事があります。

私が「美容整心精神医学」「美容整心メンタルクリニック」に考えが至った私の思考過程及び理論は、私のホームページ[中嶋英雄 AF 研究室] <http://nakajima-lab.jp/>のブログ『心の部屋』の中でシリーズの形で「心脳問題」「精神波」「自律統合性、自律統合性機能」「整心精神医学の概念」{美容整心精神医学の概念}「美容整心精神医学の臨床」の順で、論文になっていますのでご参照くだされば幸甚です。

またお問い合わせは

クリニックデュボア内、美容整心精神科（コスメチック・オルソー・メンタルクリニック）

〒100-0011 千代田区内幸町1-1-1 帝国ホテルプラザ4階

Tel03-3509-1651, Fax03-3509-1657

休診日：日曜・月曜・祝日

HP:

「中嶋英雄 AIF 研究室」 <http://nakajima-lab.jp/>